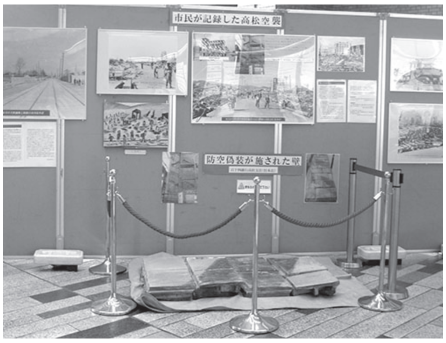
2013. 10 No.50

平和記念だより

◆編集・発行：高松市役所　人権啓発課　平和記念係
◆連　絡　先：高松市番町一丁目8番15号
TEL：087-839-2293　FAX：087-839-2291

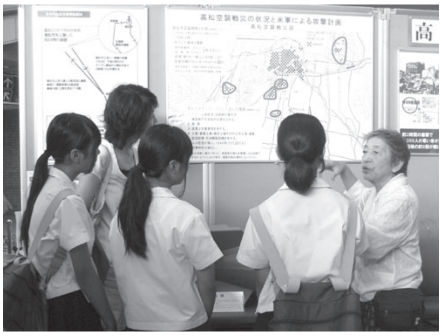
平成25年度
高松市戦争遺品展



▲　防空偽装された百十四銀行壁面

7月29日（月）～８月２日（金）にかけて高松市役所１階市民ホールにおいて第23回高松市戦争遺品展を開催しました。

今年は、高松空襲の被害状況や空襲被災写真・空襲絵画のほかに、昨年百十四銀行より寄贈を受けました「防空偽装を施された壁面」の一部と、これに関した写真パネルや空襲絵画等のコーナーを「市民が記録した高松空襲」と題して設けました。



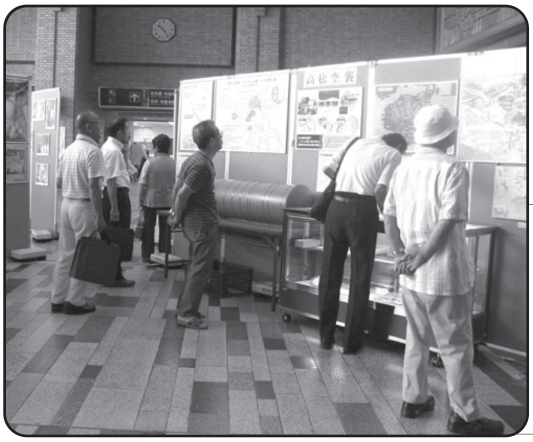
▲ 日によっては、語り部さんから説明や体験談を聞けることも。

多数のパネル展示のほか、恒例の焼夷弾（親）の実物大レプリカ（約２ｍ）・焼夷弾（子）の展示や体験談、当時使用されていた食器や玩具といった人々の暮らしを伝えるもの、被災資料、写真週報、紙芝居（レプリカ）等、約130点を展示しました。最近の寄贈品コーナーでは当時作られた竹槍（２ｍ）の展示に興味津々で見入っている来場者が多く見られました。

また、同会場にて日本ユニセフ協会にご協力いただき『戦後の子どもたちへの支援』と題したパネル展も同時開催しました。

連日幅広い年代の方にご来場いただきました。ありがとうございました。

高松市戦争遺品展・来場者の感想

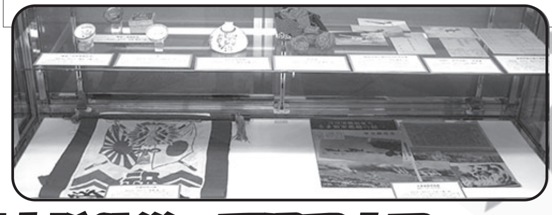


　戦争が遠いものと思っていたけど、手書きのおかしの配給書やら寄付関係のもの等、手書きのもので、「あー実際にあったことなんだー」と怖く感じました。
（４０～５０歳代・女性）

　忘れさられて風化され、語られることもだんだん少なくなってきている。どこか北朝鮮のようだとのんきにみていていいのか。思い出したくない方も、今となってはどんどん薄れていってしまった大切なものは何なのか考え直させるいい催しだと思いました。　（２～３歳頃高松空襲を体験）

　大変興味深く拝見しました。空襲のパノラマ写真のようなもの（高松全体の被害がわかるようなもの）があればもっとその様子がとらえられると思いました。
（６０歳以上・女性）

　今年私が感じたことは、焼け跡の種々の写真の横（下）に現在の写真（同じ場所からの）が在れば若い人にもよりわかりやすいと思います。平和であることがこのぐらい街を復興させたという実感が出るのではないでしょうか。
（14 歳頃高松空襲を体験）

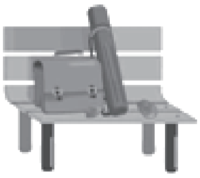


『高松戦災・原爆写真展』（主催：高松市平和を願う市民団体協議会）

8月5日（月）～8月9日（金）　高松市役所１階市民ホール

『高松市戦争遺品展』の翌週には、同会場にて今年も『高松戦災・原爆写真展』が開催されました

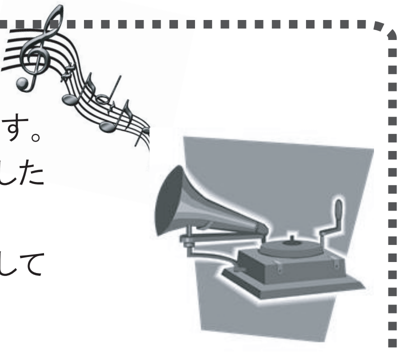
お知らせ



平和記念だより№４９「今後の行事予定」でお知らせしておりました『収蔵品巡回展』（10/26・10/27 木太小学校）は都合により中止となりました。

　人権啓発課・平和記念係では、収蔵品巡回展・市政出前ふれあいトーク「平和学習について」を行っております。開催を希望される団体はご連絡ください。

探しています！



　高松市では、引き続き戦争中の生活の様子を伝える資料等を収集しています。特に、玩具、蓄音機、戦時中のことが記載された記念誌や自分史等ございましたらご一報ください。皆様からのご提供をお待ちしています。

　ご寄贈いただいた資料は『戦争遺品展』等で展示するほか、一部貸し出しもしておりますので、詳細は人権啓発課・平和記念係までお問い合わせください。

教職員のための平和教育講演会

【日　時】 8 月 22 日　　【場　所】 高松市役所 3 階 32 会議室

今回は、高松空襲を記録する会の戸祭恭子氏を講師に迎え、「炎の中を逃げまどった７月４日」と題して御講演いただきました。また、平和記念係で小・中学校向けに貸し出ししておりますパワーポイントデータ「高松空襲と戦時中の生活」等の学習例を発表しました。

戸祭 恭子 氏 講演要旨

68 年前、高松空襲の時 14 歳だった私は「家を守らなければならない」と父が残ったため、母と姉３人と一緒に冬布団を被って逃げました。逃げている間は〝怖い〟という感情がなくなるんですよね。〝逃げる〟いうことと〝生き延びたい〟ということが一生懸命になって、爆弾やらで穴だらけになった道を裸足で淡々と歩き、死骸を踏んでも怖いとも思わない、色んなことが終わってからはじめて〝ああ、怖い〟という感情が戻ってくる。人間が、怖いとか喜怒哀楽とかいうのがなくなった時というのが一番本当は怖いのかなと、自分の体験で思います。

７月４日の空襲があった後、その後の大変さというと、今あちこちで紛争があったり、テロが あったり、その後の難民生活…そういうのとほんとにだぶってくるぐらい食べものは無し、着るものは無し、住む家は無しというのが何年か続いて、惨めな思いをしたことが思い出されます。

仏生山のちきりさんに今も当時の待避壕の跡が残っています。（機銃掃射に遭いひとりの子どもが亡くなったために作られた）こういう中に子どもが入り込んで飛行機から逃れなければならない時代があったということ。仏生山の近くの先生がもしおいでたら、こういうのもやっぱり一辺見て欲しいなと私は思うんです。

戦争が起きると、どちらかが殺されたり殺したりする世の中でしかない。「今、よく考えないといけない」と思います。

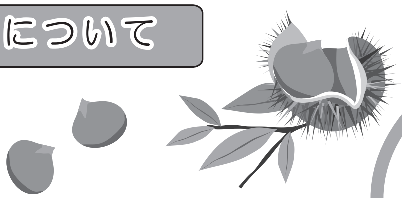
◇戦争について考えるのは今。これからの平和を考える時、何か機会があるから考えるのではなく、常に意識をもっていなければならないことを改めて感じました。自分自身は平和について、戦争について考えているつもりですが、少しでも周囲に広げていくことの重要性も感じました。

戦後６８年、各地で戦争体験を語ることのできる人が少なくなりつつあるとのこと、なんらかの形で子どもたちに伝えていかなければと思います。　(50 歳代・男性)

◇戸祭さんの話を聞くなかで、高松市内でも戦時中に実際にあった生々しい姿を聞くことができた。戸祭さんの「戦時中よりも戦後の方が大変であった」という言葉が印象的であった。

戦争が終わったらすべて解決するわけではないということがよくわかった。「とにかく生きたい」と強く願った戸祭さんの「命を大切に」という思いが深く心に残った。　(30 歳代・女性)

平和記念係の資料貸し出しについて

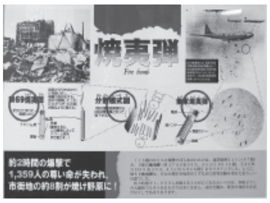


平和記念係では、パネルや実物資料など収蔵資料の貸し出しを行っています。昨年度は、個人・団体合わせて計13件、100点余りの貸し出しがありました。

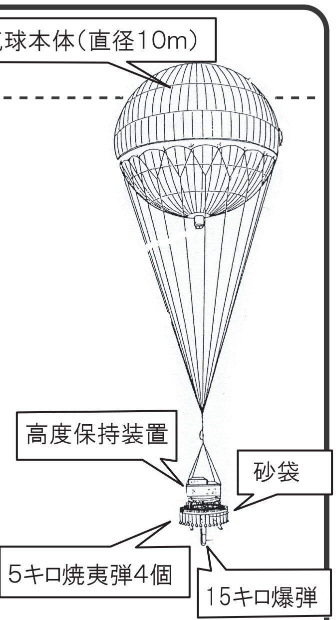
◆

市民文化センターの閉館に伴い、H24年度より常設展示が無くなり、収蔵品の保管場所も他所へ移動しております。そのため貸し出しに関してもご不便をおかけしますが、貸し出しセットを常備する等で対応して参りますので、貸し出し期間・貸し出し物品など、詳しくは人権啓発課・平和記念係までお問い合わせください。当時の様子を伝える貴重な資料ですので、地域や学校で戦争に関する展示を行う際の展示物として、また、語り部の方のお話を聞く時の資料として、ぜひご活用いただければと思います。

◆ ◆ ◆



戦時用語解説㊹　風船爆弾（ふ号兵器）



日本には米本土を爆撃できるような航続距離の長い航空機製作はおぼつかなく、そこで、気球による攻撃の研究が急速に進められた。高度１万mで偏西風に乗せれば時速200kmで飛び、２，３日で米本土に到着する。

風船の本体に日本独自の丈夫な和紙が用いられることになった。

風船の球皮にあたる部分は、コウゾの長繊維で漉いた良質の和紙をコンニャクの粉末でつくった糊で３枚または４枚張り合わせ、この原紙（一畳分くらい）を苛性ソーダー液で強化処理し、グリセリン液で軟化したのち切断成型した。

浮力には安全なヘリウムを使いたかったが、高価であるため水素ガスが用いられた。これに自動高度調節装置等が装着され、総重量は200kg前後になっていた。

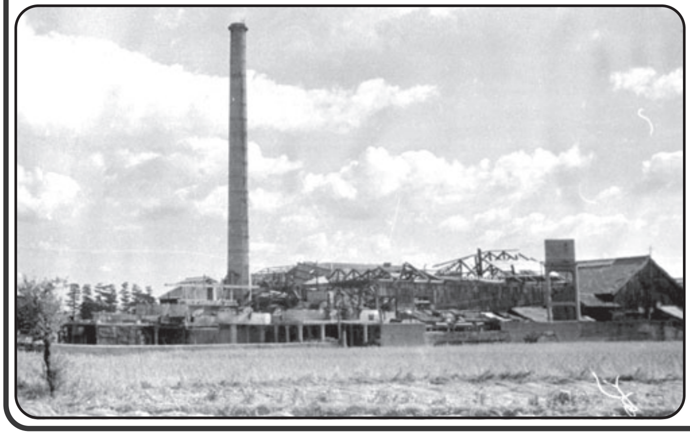
風船工場には、それを膨らまして穴の有無を検査しなければならないため、柱のない広いホールが必要で、閉鎖された日劇や東宝劇場、国技館などが使われ、風船はりに活躍した工員も日の丸の鉢巻をしめた女子学生や芸者さんの女子挺身隊たちであった。

この風船爆弾（直径約10m）は特定の目標に命中させることは不可能だが、山火事でも起こしてくれればよしとする大雑把な計画であった。

最初の発射は、1944（昭和19）年11月３日の明治節（現・文化の日）午前５時で、３基地の42の発射点から一斉に行われたが、千葉県一宮以外は発射前に爆発事故がおきて失敗したという。７日以降に再び攻撃を開始して翌年３月には１日150個以上にもなっていたという。なお、毎回気球１個には無線機を積んで追跡観測した。４月までの偏西風の季節の約半年間にわたり、合計9000個（6000個ともいわれる）を飛ばして米本土空襲を行った。製造費は当時の金額で１個10000円、決して安い値段ではない。

冬の気候が絶好だからこの時期が選ばれたのであるが、雪の多い季節であり、搭載弾が焼夷弾であったため、実質的な効果（モンタナ州に山火事などを起こさせた気球を含めて1000個が米本土に、到達したとされている。）はほとんどなかった。（米側の報道管制があり、戦果不明のまま戦争が終わる。戦後分かったところでは、米本土に到着の内空中爆発100、不発200、最長到達距離はデトロイトであった。）

“風船爆弾”や“気球爆弾”は戦後の俗称である。風は逆に吹かないから他国には真似できず、現代流にいえばさしずめ無動力大陸弾道弾といったところ。



◀ **常盤製紙：S20 年撮影**

戦時中工場の軍事転用を命ぜられ、風船爆弾用の和紙を製造していた。女学生が学徒動員で働きに来ていた。室新町では、この一帯だけが空襲にあった。

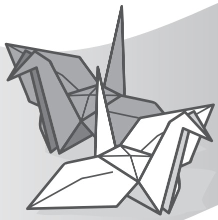
収蔵品紹介 43　国民服

国民のユニフォームとしての国民服を作るために、1939（昭和14）年12月、国民服の第一次審査が行われた。軍服に似た服装で、帽子・儀礼章も併せて定めることになり、試作品が出された。

戦時下の衣料簡素化のため1940（昭和15）年11月２日、大日本帝国国民服令（勅令）で制定。軍服をモデルにしたカーキ色（国防色）の服。甲乙２種あり、甲型は背広に代わるもの、乙型は青少年向き。儀礼章をつければ礼服にも使用できた。国民帽も烏帽子型と戦闘帽型の２種。これに黒革短靴で白手袋を着用することになっていた。

男性は軍服に似た国民服を着るのがよいとされ、女性は花嫁衣裳まで、モンペ姿がすすめられた。

写真の国民服は、乙型です



編集メモ

今回は、「戦争遺品店」のほか、「教職員のための平和教育講演会」の様子や、資料貸し出しについてお知らせしました。

平和記念係ではパネル等の資料貸し出しも行っておりますので、平和について改めて考えるきっかけ作りに是非お役立て下さい。

▼ホームページアドレス（平和啓発の推進事業がご覧いただけます）

http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/18976.html